

台湾製糖の発展に尽くした

まるた

じたろう

丸田治太郎 (1886-1942)

台湾製糖に入社する

治太郎は 1866 年（慶応 2）下保倉村（現・浦川原区）横川で、父定一郎、母ステの長男として生まれました。慶應義塾に学び、卒業後は安田銀行を経て、勸業銀行に勤務し、ここでのちに農林大臣となる山本悌二郎と出会いました。山本が台湾製糖の支配人になったとき、治太郎は見込まれて同じ会社に入りました。

台湾製糖株式会社は日清戦争後の 1900 年（明治 33）日本領となった台湾で砂糖製造のために設立された三井系の会社です（現在の三井製糖株式会社）。

台湾製糖発展の基礎を築く

治太郎の最初の仕事は、自営農場の設立にむけた土地の売買でした。当時の台湾は治安が悪く、仕事は進みませんでした。治太郎は忍耐強く地主の説得にあたり交渉をまとめました。台湾製糖が広大な自営農場を持ち、安定した会社経営を可能にした背景にはこのような彼の苦難と尽力がありました。その後、治太郎は常務取締役になりました。

大正期から昭和初期にかけて、彼の縁をたより東頸城郡内から多くの人々が農場労働者として台湾へ出稼ぎに行きました。

1914 年（大正 3）から 1918 年（大正 7）まで、東頸城郡全体では 1011 人（延人数）、1918 年は安塚村 68 人、下保倉村 17 人の台湾への出稼者数の記録が残っています。

日中戦争が始まり、1938 年（昭和 13）武漢陥落行事の提灯行列に国内が浮かれているとき、治太郎は直江津町出身で北京在住の後輩中沢正治（日満製粉社長）に手紙を送り、戦争の長期化を憂慮していました。また、太平洋戦争が始まると敗戦を予告していたと伝えられています。

1942 年（昭和 17）治太郎は東京都池袋の自宅で亡くなりました。墓は浦川原区顕聖寺にあります。